

『地域言語』の潜在的可能性

Potentiality of “Regional Language”

2011年3月

小池 保

『地域言語』の潜在的可能性

小池 保

Potentiality of “Regional Language”

KOIKE Tamotsu

Summary

In consequence of the postwar ‘dialect eradication campaign,’ the standardization of Japanese language was promoted nationwide and the linguistic regional specificities have been excluded. Out of the regret, an activity to preserve the regional dialect was cranked-up in Okinawa. The question – “Who are we” was the core concept of the activity. By contrast, the people in Kansai area who are proud of their linguistic regional specificities have been demonstrated their own way of thinking and minds. They have been contributed to the postwar society by spiritedly sending out the message to all part of the country. Taking the both cases happened in Okinawa and Kansai into consideration, we can find that the answer to the question “Who are we” is the ‘way of thinking and mind” which is pulsating in every regional dialects. The ‘way of thinking and mind’ will be activated by using their own regional dialect by the local people. Then, The question now is how we should handle it. We should recommend the continuous practices of the use of the local language in not only the private but also the public situations. That will activate the way of thinking and mind by those activities, and it will make it possible that people can have their own regional specific way of thinking. The decentralized society we are looking for is creating the new brilliant era of the diversity in regional dialects to deliver the variety of unique way of thinking and mind in every region to whole part of the nation.

Key Word

Dialect, Regional languages, Way of thinking, Mind, Diversity of speech, Dispatch

【要約】

戦後の「方言撲滅運動」推進によって、各地域本来のことばが失われてきた。その反省から、1970年代以降、沖縄では地域のことばの見直し運動が活発化した。その中心には、「自分たちは何ものか」という問いがあった。一方、地域のことばに対する誇りを保ち続けてきた関西の人々は、自分たちのことばの中に息づく、その地域に独特な発想やマインドを発揮できた。それによって、全国に向けて豊かな発信を続け、戦後社会に貢献してきた。関西と沖縄の動

きを併せて考えてみると、「自分たちは何ものか」の問いの先にあるものこそ、地域のことばの中に脈動する「発想・マインド」に他ならないことに気がつく。その「発想・マインド」は、自分の地域のことばを、とにかく使うことによって活性化する。ならば、どのように使うべきなのか。地域のことばを私的場面はもちろん、公的場面でも意識化し果敢に使ってゆく実践の継続である。実践によって発想・マインドが賦活され、その地域ならではの真に個性的な発信が可能になる。私たちが向かう分権社会は、各地の多様な発想・マインドが、それぞれに独特な発信となって全国に届く、地域言語多様性開花の時代に他ならない。

[キーワード]

方言、地域言語、発想、マインド、言語的多様性、発信

はじめに ～「祖国とは国語」という仮説から

「私たちは、ある国に住むのではない。ある国語に住むのだ。祖国とは国語だ」。これは、ルーマニアの作家エミール・シオラン（1911～1995）が、『告白と呪詛』の中で遺したことばである¹⁾。2005年の超ベストセラー『国家の品格』で知られる数学者・藤原正彦も、2003年出版の著作に『祖国とは国語』のタイトルを冠するなど、何度もシオランのことばを引用²⁾している。人間にとっての真のアイデンティティは国語の中にこそある——この考えに立てば、「日本とは日本語だ」であり、入れ子のように「地域とはお国とは、方言、つまり地域言語だ」という連関が見えてくる。つまり地域に住む人々にとって、「地域言語」の中に自らの本質・アイデンティティが包含されていることに思い至るのである。

本稿ではこの仮説に立った上で、沖縄・関西、そして東北のことばを中心に取りあげ、今やそれぞれのお国・地域にとっての喫緊の課題となっている「分権社会」というテーマと重ね合わせながら考察してゆく。現在構想されている、新潟州や中京都や大阪都などが更に実現性を高めてゆくとすれば、それぞれの地域にとって「お国とは方言」なのであるから、「お国」のアイデンティティは「地域言語」の中に再発見され、励起され、その地域独特な発信が、全国に向けて、そしてグローバルに開始されてゆくという流れが生まれてくる必要がある。つまり、地域のことばは、そのような文脈の中で再発見される必要がある。地方分権の時代とは、「地域言語」の中に息づいているはずの「自己」を見つけ出し、標準語とのバイリンガル感覚の効果も享受しながら、闊達に発揮してゆくべき時代なのである。

全国の地域のことばの中に、そのような力を発揮しうるアイデンティティや独自性があるのだろうか。本稿は、「ある」「まだ十分に残っている」、あるいは「忘れたことは思い出してゆけばよい」という立場から論考を進めてゆく。確かに私たち日本人は、東京一極集中、大量生産大量消費、そして標準語に席卷された戦後数十年の中で、自らのことばの中に受け継

がれてきた貴重な何かを、否定しなげうってきた。しかし、それぞれの地域において、長い歴史と風土によって培われ、ことばの中で輝いていた「何か」は、そう簡単には消滅しなかったはず。それらの発現のいくつかの具体事例について、詳らかにしてゆく。結果として本稿は、地域言語の中に生きている「文化的自己」の、再発見と認識と活用のおすすめとなり、「祖国とは国語だ」という仮説の真実性に限りなく接近してゆくことになるはずである。

1. 沖縄ことば 研究の系譜

1. 1 2011年春、竹富方言辞典の刊行

沖縄八重山諸島のひとつ竹富島のことば（テドゥンムニ）を26年間にわたって研究してきた成果として、『竹富方言辞典』³⁾が、2011年3月に刊行された。B5版1,500ページ余り。収録語彙数は、国際音声字母による音声表記を施された17,710語。この数は、沖縄のことばに関連する辞典の中で最多であり、この辞典編集のためのフィールドワークの緻密さを窺わせる。国立国語研究所が1963年に出版（1998年に再版）した『沖縄語辞典』と、琉球大学名誉教授・仲宗根政善（1907～1995）がまとめた『沖縄 今帰仁方言辞典（1983年刊）』が共に15,000語。吉川英治文化賞を受けた、那覇市文化協会顧問の宮城信勇の『石垣方言辞典（1983年刊）』が17,600語であった。

『竹富方言辞典』では、竹富島の伝統的民族文化に関する豊富な記述と、沖縄古語・石垣方言、それに首里方言との比較検討を通して、例えば「シマンチュ」が、竹富島では「シマビトゥ」と言われるなど、同じ沖縄における豊かな地域多様性のひとつの証として、竹富方言の姿をも浮かび上がらせてくれている。

本稿ではまず、この辞典の著者の思いに注目し論を開始したい。著者は、現在は石垣島に住む前新 透^{まえあら とおる}である。1924年に竹富島に生まれた前新は、今年87歳。竹富中学校の国語教師として出発したキャリアを定年退職によって締め括った後から、自らの「母語」であるテドゥンムニについて内省し、古老を訪ねて語彙や文例を収集しながら、26年かけて研究を続けてきた。編著者として、沖縄県立芸術大学教授で「おもろさうし」研究でも著名な波照間永吉の協力が得られた点は重要である。編著にはほかにも、中学校での教え子だった高嶺方祐と入里照男が名を連ねている。

2011年2月7日付の琉球新報の記事の一部を、以下に引用する。

前新さんは15歳まで島で過ごし、25歳で竹富中学校に赴任した。当時は県内では標準語励行が盛んに行われた時代。国語教師だった前新さんも「方言の交じった変な標準語は島を出たら通用しない」と率先して生徒たちを指導したという。「そうしなければならない時代だった。でも、方言という味わい深い言葉があるんだから標準語も方言も大事にすべきだと教えるべきだった」と複雑

な思いを語る。1985年に石垣市立大浜小学校の校長を退職後、かねてからやりたいと思っていた方言収集を始めた。大学ノートに見出し語と説明、例文を書いていく。気付くと2万2千語、ノート40冊分にもなっていた。

(2011.7 琉球新報より)

1. 2 ト라우マとしての方言撲滅運動

労作を生んだ美談と捉えるだけでなく、標準語を使わせようと率先して生徒たちを指導した前新透が、竹富島のことばの収集都研究に転じた動機を理解しておく必要がある。それには、「方言札」の存在と、その活用を通じた、沖縄における「方言撲滅運動」を見逃すわけにはいかない。

明治時代から始まった皇民化政策によって、沖縄でも天皇崇拝が強要され、方言は使わず標準語を励行する指導が強力に進められてきた。仮に沖縄本島・宮古島・八重山の人々が一堂に会して、島のことばのみで話したとすると、話が全く通じないと言われていたほど、同じ沖縄の人間どうしても、島が異なっただけで意思疎通が難しいという当時の現実があったからであった。

前新が竹富中学校教員としての人生を開始した日本の敗戦直後には、沖縄の人々の内地化、文化的内面の抑圧は相当程度に進んでいた。これに関する象徴的な出来事として、日本民芸教会の柳宗悦による方言論争を挙げることができる。1940年1月、沖縄を訪れた柳宗悦は、県学務課が推し進めていた標準語励行運動に対して眉をひそめた。屈辱感を与え、行き過ぎではないかと批判したのである。この柳の指摘に対して、県の内外に方言論争が巻き起こった。県は「沖縄県民が県外で誤解や不利益を受けたり、引っ込み思案になったりしてしまうのは、標準語の力が劣っているからであり、標準語励行こそが県民を繁栄に導く唯一の道である」と強く反発した。今から考えれば屈折した考え方ではあるが、当時の沖縄の人たちにとっても、既に一般的意識だったのである。

前新さんが新米教師として着任したアメリカ軍統治下の沖縄の教育現場では、標準語の使用を押し進める考え方が当然のこととして引き継がれていた。方言禁止を強圧する表現として、「方言札」が積極的に肯定され用いられていた。

方言札は、うっかり方言を使ってしまった子に対して、罰として首から下げさせたもので、校内での見せしめとした。方言を使う別の子が「挙げられる」まではその屈辱から解放されない。胸元に方言札を下げたまま、廊下に立たされるという罰則もあった。従って、授業の合間の休憩時間には、方言を口にする子がどこか他にいないか、友達の後をつけて、何かあれば言いつけるという、さながらことばの監視社会が教育現場の中に風土化していた。5・6時間目までに次なる犠牲者が見つからない場合には、何が何でも解放されたいという一心から、適当な子を探しては足を踏みつけ、「アガーッ（痛いっ！）」と声を出させて方言札を押しつけて逃げる姿が、しばしば目にされたという。まさに「方言撲滅運動」が、沖縄においても強力に展開されていたのである。

筆者は1998年に、NHKの解説番組の取材で竹富島を訪れ、喜宝院蒐集館という民俗資料館に収蔵されている方言札の現物をビデオ撮影した経験を持っている。展示されていた方言札は、カマボコの板の大きさと形で、表に「方言札」と墨書されていた。竹富島内で用いられていた方言札としては一般的なものであったが、大きな板でできたものや、重い鉄板製のものもあり、昭和40年頃までは使われていたという証言も得られた。しかし思い出したくない屈辱の記憶ゆえであろう、そのどれもが既に廃棄されており、現存する方言札を見つけ出すのは極めて困難である。

前新は、国語教師として「方言の交じった変な標準語は島を出たら通用しない」と考え、「率先して生徒たちを指導した」。「そうしなければならぬ時代だった」ために、若い教員として、方言札による「方言撲滅運動」に、結果として関わってきてしまったのであった。アメリカ軍の統治、日本の標準語。2重の異質に押し潰される、まさに「アメリカ世」「にが世」の中で教師人生をスタートさせた前新に、文字通りの苦い思いが頭を持ち上げ始める。

確かに、戦後沖縄における標準語化教育によって、スムーズな意思疎通が可能になった。しかしながら前新は、「時代の指導方針だったとはいえ、竹富のことばも標準語も、どちらも大切に、両方きちんと話せるように指導すべきだった」と考え始める。標準語化が進むのと引き換えに、周囲から急速に「竹富のことば＝テードウン ムニ」が消えてゆく。前新は、その様子を看過できなくなってきたのである。

前新は子どもだった頃、親はもちろん周囲の人間からも、島に伝わる次の俚諺をよく聞かされて育ったことを思い出す。

「ムニ バッキター、シマバッキ、シマ バッキター、ウヤ バッキルン」

「ことばを忘れたら、(自分が生まれた)島を忘れ、島を忘れたら、(自分を産み育ててくれた)親までも忘れる」という意味である。「島を忘れ」「親までも忘れる」とは、自分たちが大切にしてきた、祖先から引き継がれてきた文化も忘れてゆくことである。米軍基地の存在がひき起こす様々な問題や、沖縄の本土への従属関係が明らかになるたびに、「自分たちはいったい何者なのか」「自己のアイデンティティとは何なのか」という問いかけが前新の心に葛藤をもたらす。その時、心にあぶり出されてくることばが「ムニ バッキター、シマバッキ……」であった。

昭和60(1985)年、定年で教員生活を締めくくった後、前新は堰を切ったように、テードウンムニの語彙・文例収集の研究活動を開始した。その1985年頃には、竹富島のことばは危険水域に入ろうとしていたと言っても、決して大げさではない。事実ユネスコが、世界2500の言語の中において消滅の危機に瀕した言語のひとつとして、竹富島を含む八重山諸島それぞれの「八重山語」を挙げ、「重大な危機」の一步手前の「危険」ランクに組み込んだのは、2009年のことであった。前新は、体調がすぐれなくなってからも執念を燃やし続け、平成23(2011)年、87歳の春、『竹富方言辞典』の完成へと漕ぎ着けたのである。

1. 3 竹富方言辞典の今日的意味

前新を竹富のことばの研究に駆り立てた、「自分たちは何者か」という問いは、100年の系譜を持つ「沖縄学」の存在と必然的に結びついてくる。沖縄学こそ、「沖縄とは何か」「自分たちとは何者なのか」について突き詰め、それをもとに様々な沖縄の現実と向き合っとうと志し、研究を続けている学問だからである。研究の主な対象は、琉球のことばで綴られた「おもろさうし」や沖縄各地の地域言語である。

「沖縄学の父」と称されるのが、伊波普猷（1876～1947）である。伊波が今から丁度100年前、明治44（1910）年に著した『古琉球』が、沖縄学の源とされる。「沖縄 今帰仁方言辞典」を編纂した仲宗根政善（1907～1995）、東京新宿に沖縄学研究所を開いた外間守善、国立国語研究所編の「沖縄語辞典」編纂に多大な貢献をした島袋盛敏（1890～1970）、そして「竹富方言辞典」の編著に名を連ね、現代の「おもろ」研究の中心にいるひとり、波照間永吉などなど、多くの研究者たちが、伊波普猷の志を受け継いでいる。先述の通り、波照間が「竹富方言辞典」の編著の中心に名を連ねているのも、前新の手になるこの辞典が沖縄学100年の系譜に属する業績であるからに他ならない。

沖縄学の精神は、伊波普猷が『古琉球』⁴のまえがきの中に万年筆で手書きした以下のことばに凝縮されている。

「深く掘れ 己の胸中の泉 餘所たよて水や汲まぬごとし」

他人の井戸を頼って水を求めるのではなく、己の胸中の泉を深掘りせよ。沖縄の思いが凝集したことばの深奥にまで降りて行って、沖縄とは何か、己とはいったい誰なのかを突きとめようという、沖縄人の心を鼓舞せんとする宣言である。沖縄の思いが凝集したことばとは、伊波にとっては「おもろさうし」のことばであった。「おもろさうし」は、1531年から1623年にかけて編纂され、祭祀とかかわる神歌を集めた、いわば聖典である。「おもろ」とは「うむい」の転であり、「うむい」とは「おもい」のことである。つまり「おもろさうし」全22巻1,554首のことばに込められた「思い」を突きとめる研究、それこそが、沖縄のアイデンティティに至る道であると、伊波は考えた。

伊波普猷の「深く掘れ 己の胸中の泉」は、ルーマニアの作家エミール・シオラン（1911～1995）が遺したことば、「祖国とは国語である」を想起させる。このことばは、偏狭な国家主義を鼓舞しようとするものでは決してない。シオランのことばを自身の著作タイトルに冠した数学者・藤原正彦は、その『祖国とは国語』の中で次のように述べている（行替えは筆者）。

確かに祖国とは血ではない。どの民族も混じり合っていて、純粋な血などというものは存在しない。

祖国とは国土でもない。ユーラシア大陸の国々は、日本とは異なり、有史以来戦争ばかりしていて、そのたびに占領したりされたりしている。にもかかわらずドイツもフランスもポーランドもなくなるらない。

祖国とは国語である。

祖国と呼べる自分の本質的なものが帰属するのは、民族でもなければ、国土という空間でもない。祖国とは国語の中にあり、私たちの本質は私たちが話すことばの中にあるのである。沖縄のことばの中にも、沖縄を沖縄たらしめている「何か」が含まれているはずである。沖縄のことばの研究を深めながら、「おもろさうし」に込められた沖縄の思い・魂に迫り、沖縄の独自性・存在価値を明らかにしてゆく——『竹富方言辞典』は、沖縄のアイデンティティを探る手がかりを更につけ加えたという意味で、「沖縄学」の100年にわたる系譜の中に位置づけられると言っても差し支えないであろう。

1. 4 「沖縄学」100年、伊波普猷の志を継ぐ者たち

前新の業績だけでなく、伊波普猷の思いを引き継ぐ者たちの活動は、この100年、様々な困難を乗り越えながら地道に弛むことなく継続されてきた。

琉球大学内には、「琉球大学方言研究クラブ」がある。1957（昭和32）年、伊波普猷の愛弟子であった仲宗根政善が、学生の声に応じて創設したものである。沖縄各地のことばについて、現地に赴いて調査するフィールドワークの手法を中心に解明を進めてゆくとするクラブである。現在の学生たちは、自分たちが分からない沖縄各地のことばの収集や聞き取りのフィールドワークを通して、沖縄民衆の思いと歴史を学んでいる。その毎年の成果は、『琉球方言』にまとめられており、しばしば引用されるなど、研究レベルは高く評価されている。中本正智（1936～1994）をはじめ、クラブでの活動の入口に、研究者として活躍している人材も輩出している。

沖縄県立芸術大学には「おもろ研究会」がある。毎週末の夕方から、文学・言語学・民俗学など様々な分野の研究者のほか、学生や市民も加わって「おもろさうし」の読み解きを続けている。研究会が生まれたのは昭和43（1968）年であるから、既に40年以上前のことである。琉球大学国文科の助手や学生など、若い人たちの手によって生まれた「おもろ研究会」は翌年、仲宗根政善の指導を受けることになり研究が本格化してゆく。現在は波照間永吉の指導のもと県立芸大が研究の場となっており、研究会は通算すると千数百回を数える。「おもろさうし」全22巻、1554首の読み解きを何度も重ね、現在も継続されている。衆知を集めての深い読み解きとなるため、2010年3月現在、何回目かの読み解きがようやく3分の1を過ぎたあたりである。

ほぼ解読は済んだとされながら、5000近くの語彙のうち数パーセントは未詳語だと言われる。それらの解釈もさることながら、様々な角度から古代沖縄の生活・習慣を参照しながら、当時の人々の心情まで探ってゆくことが、沖縄のアイデンティティを照らし出そうとする探求には求められている。「おもろ」の読み解きを深める伊波普猷の志を継ぐ取り組みのたゆま

ざる継続によって、古代の信仰や祭祀のあり方、アジア諸国との豊かな交流などが、更に解き明かされつつあり、沖縄の人たちの魂のふるさとの姿が、より深く判明しつつある。

2. 沖縄のことばをめぐる近年の環境変化

竹富島だけではなく、沖縄各地の本来のことばが、前新さんが憂えた状況に置かれていることは言うまでもない。若者を中心に標準語使用が一般化し、沖縄本来のことばが使えない人が増えてきていることは確かである。しかし最近では、自分たち本来のことばを少しでも生活の中で使っていくべきであるという、沖縄ことば継承への思いも次第に強まりつつある。

沖縄復帰後もしばらくは方言札が用いられ方言撲滅運動が続いていた沖縄で、最近はどのような変化が進行中であるのか、その変化の例を各地に拾ってみよう。

2. 1 竹富島島民の方言活動における変化

前新さんのふるさと竹富島では、テードゥンムニの衰退が強く意識され始めた1978（昭和53）年の秋から、保育園児や小中学生、それに教職員が公民館などに集まって、「テードゥンムニ大会」を開くようになった。2010年の大会は第33回となり、11月2日の夜に島内のまちなみ館で開かれた。100人以上集まった老若男女を前に、事前に特訓を受けてきた保育所の幼児たちや小中学校の児童生徒・教職員が舞台上がり、全てのことばがテードゥンムニによる、民話や創作童話や寸劇を披露し、竹富島のことばをどこまで使いこなせているか、審査を受けた。

この大会には合言葉がある。

ケーラン テードゥンムニユ 守リオーラ クヌファーマーユ 育ティオーラ
ムニバッキタ 島バッキ 島バッキタ 親バッキルン

皆で竹富島ことばを守り、島の子どもたちを育てよう。ことばを忘れたら島を忘れ、島を忘れたら、親までも忘れる——ほとんどが島民どうしの結婚だった昔はことばの問題を意識したことはなかったが、今は島以外の地区からのお嫁さんが多く、親がよほどしっかり教えてゆかないと、ことばを忘れ島を忘れ、遂には親をも忘れかねないのだと、老人会の人話す。また、島人たちが、「学校では標準語を使うとしても、せめて家庭では本来の竹富島のことばを大切にしよう」「各家庭で週に1日は、竹富のことばの日を設けてはどうか」などと、具体的な提言を持ち出しながら呼びかける。33回も大会を続ける島人の努力によって、「テードゥン ヤマトムニ（竹富ことば風の標準語）」、あるいは「ヤマト テードゥンムニ（標準語風の竹富ことば）」という、いわば「地域標準語」の状況ではあっても、島のことばは土俵際でしっかりと踏ん張っている。

2. 2 沖縄県政の方言認識の大変化

沖縄県議会においても、大きな変化がごく最近起こった。平成18（2006）年3月の沖縄県議会で、遂に「しまくとぅばの日」制定条例の決議がなされたのである。「しまくとぅば」とは「島ことば」、つまり沖縄ことばのことである。以下の引用は、標準語に押しつぶされてきた沖縄のことばにとって、革命的とも言えるニュースを伝える、平成18（2006）年3月29日の琉球新報である（行替えは筆者）。

県議会（外間盛善議長）の2月定例会最終本会議が29日開かれ、ウチナーグチの普及促進を図るため9月18日を「しまくとぅばの日」と定め、県に普及事業などを義務付けた条例案を全会一致で可決した。都道府県議会で地域の方言を奨励する趣旨の条例は全国初。沖縄県議会の議員発議による条例は復帰後3件目。総額5957億円の2006年度一般会計予算案を賛成多数で可決、産婦人科医など県立病院の医師確保を求めた要請決議や沖縄科学技術大学院大学の早期開学に関する要請決議などは全会一致で可決する。

しまくとぅばの日を定めた条例は県に送付され、10日前後で手続きを終えて県が公布。公布の日と同時に施行される。浦崎唯昭氏（県民の会が「ドゥーヌシマクトゥバチカリスルクトゥワシレサンタメニ（自分らのしまくとぅばを伝え、忘れないために）」などと方言を交えて提案理由を説明した。

更に以下の引用は、毎年9月18日を「しまくとぅばの日」と定める条例の一部である（行替えは筆者）。

平成18年3月31日 条例第35号

しまくとぅばの日に関する条例をここに公布する。

しまくとぅばの日に関する条例

（趣旨）

第1条 県内各地域において世代を越えて受け継がれてきたしまくとぅばは、本県文化の基層であり、しまくとぅばを次世代へ継承していくことが重要であることにかんがみ、県民のしまくとぅばに対する関心と理解を深め、もってしまくとぅばの普及の促進を図るため、しまくとぅばの日を設ける。

（しまくとぅばの日）

第2条 しまくとぅばの日は、9月18日とする。

（事業）

第3条 県は、しまくとぅばの日の啓発に努めるとともに、その日を中心としてしまくとぅばの普及促進のための事業を行うものとする。県は、市町村及び関係団体に対し、しまくとぅばの普及促進のための事業が行われるよう協力を求めるものとする。

条例の中で注目すべきことばは、第1条に出てくる「しまくとぅばは、本県文化の基層」である。ここに表出している行政認識の転換は、沖縄ことばが耐えてきた「弾圧」の歴史を知る人々にとって、驚天動地のことであると言っても過言ではないだろう。そのような大きな変化が突然起こるわけもなく、もちろん前奏曲的な出来事が存在していた。平成5(1993)年の糸満市議会3月定例会の、一般質問における事件もそのひとつである。質問に立った議員が、凡そ2800字の「うちなーぐち」、つまり「沖縄のことば」で作成した原稿をもとに質問を始め、1分ほどで議長に制止され議会在中絶したという騒ぎである。「方言での質問は前例がない」として制止しようとする議会に対してこの議員は、「昔は方言札を下げられたが、今はウチナーグチは見直され、学校でも方言大会が開催されている。言葉はまさに文化だ(琉球新報 平成5年3月16日 表記ママ)」と対抗した。沖縄では、「新『方言撲滅論』?」(琉球新報 平成5年3月21日)などと、このニュースが沖縄で一定の関心を集めたのも、発言した議員を鼓舞したいとする気分が、既にそのとき社会に広まっていたからである。

「しまくとぅばの日」制定を準備した沖縄県政における認識変化は、この騒動の13年も後のことであり、その後さらに進んだ沖縄のことばへの認識の変化を追認したもの過ぎない。

2. 3 沖縄県民の言語意識の変化

糸満市議会での騒動勃発に先行するかたちで、沖縄県民の沖縄のことばに対する意識の変化は、既に顕著になっていた。その意識変化は例えば、「しまくとぅば語やびら大会」の開催にもあらわれている。この大会は、平成7(1995)年前後から、沖縄の25市町村にある地区の文化協会ごとにかれるようになり、同じ年の秋には県の文化協会主催による沖縄県全体から代表が集まってくる県大会も開催されるようになった。また沖縄では、方言大会に備えた小中学校の日常活動として「しまことば教室」を開いているケースが多い。これは、文部科学省の委託事業として全国で展開されている「放課後子ども教室」の沖縄的活用である。例えば、浦添市の沢岬小学校では、毎週月・木の放課後、3:30から1時間、方言をよく知る地元の3人をボランティア講師として招き、教室を実施している。

ここでは地域ごとの大会のひとつの例として、平成22(2010)年5月29日夜に開かれた、宮古島市文化協会主催の「鳴りとうゆんみゃーく方言大会」の様子について簡単に紹介しておこう。宮古島の方言も、消滅の危機に瀕したことばのひとつに数えられている。「鳴りとうゆんみゃーく」とは、「鳴り響く宮古のことば」という意味で、自分たちのことばに活力を吹き込もうという気概を込めたネーミングである。宮古島市のマティダ市民劇場で開催されたこの大会は、平成22年で17回目を迎えた。800円の入場チケット520枚の前売りは長蛇の列となり、僅か数十分で完売した。以下は、この方言大会について伝える、宮古新報の記事の一部である(一部省略および行替えは筆者 表記ママ)。

7人の弁士たちが宮古方言で個性あふれる体験談や思いなどを発表。会場は満員の聴衆で埋まり、宮古方言のゆかいな語り口調に笑いが絶えなかった。この大会は貴重な地域言語である方言を使用困難な言葉として敬遠される不本意

な世情にかんがみ、それぞれの地域に脈々と息づいている共有財産「方言」に対する各世代の認識を深めることを目的に開催されている。最優秀賞の与那覇冨子さんは仕事の中での話を発表し、会場を笑いの渦に包んだ。同文化協会の友利吉博会長は「宮古方言はこのままでは絶滅する『希少言語』と懸念されている。文化協会は危機感を持ってこの大会を開いている。宮古方言を日常的に使いこなし、方言ならではの言い回しなど駆使して熱弁をふるう弁士たちを紹介する事で、宮古方言に明るい展望を見いだしたい」と述べた。

この宮古島など、県内各地の方言大会で優秀者となった児童や一般の人たちが、次に県文化協会の推薦を受けて臨むのが、県全体の方言イベントとしての「しまくとぅば語やびら大会」である。「しまくとぅばの日」が制定される以前から既に存在していた大会ではあるが、制定後は毎年9月18日に開かれる恒例行事となっている。平成22(2010)年の第16回県大会は、9月18日、読谷村の文化ホールに、沖縄本島北部から宮古・八重山地方に至る、小学1年生から89歳までの代表26組29人を集めて開かれた。地域に伝わる民話や生活習慣など、出場者がそれぞれの土地のことばで語り、衣装や三線などの工夫を凝らし、身振り手振りで、700人をこえる客席を盛り上げた。この2010年の大会から、パワーポイントを使って共通語の字幕をスクリーンに投射する試みが始まった。一説には、琉球弧内部の方言差は、青森弁と鹿児島弁の差よりも大きいと言われる。宮古島だけでも10はあるという多様性豊かな各地の方言が飛び交っても、誰でも内容を楽しめるようにとの配慮によるもので、大会のメッセージもよく伝わり、方言の理解と共有に効果があったと評価された。

2. 4 沖縄県民のアイデンティティを求める意識変化

現在の沖縄の人々の、方言に対する熱意が生まれてきたプロセスを理解するために、「沖縄タイムス」や「琉球新報」を10年ごとに概観すると見えてくる傾向を押さえておきたい。

60年代は「共通語を家庭でも」と呼びかけたり、共通語の陥りやすい間違いを指摘したりする記事が目立っていた。全国が急速に均質化していったこの頃、「祖国復帰」を願った沖縄も、ことばの面では進んで内地化していった様子が見てとれる。ところが沖縄返還が実現した70年代に入ると、一転してアイデンティティへの関心が高まり始め、しまことばの退潮を嘆く論調が増えてくる。80年代には、しまことばの衰退を問題視する声が登場し、更に90年代になると、しまことばが失われることを、どのようにしたら防げるかという積極的な関心に、記事の方向舵が切られていった。因みに、国立国語研究所が昭和38(1963)年に編纂した「沖縄語辞典」の再版バージョン2000部が、専門家向けの5400円もする辞典だったにもかかわらず、1ヶ月で完売してしまったのは、平成11(1999)年のことである。そして2000年代に入ると、記事の論調は、方言をいかに残し、生活の中に取り戻してゆけるのかというモードに突入してゆく。そのことは既に述べたように、県政も含めた沖縄の人々の現況ともシンクロしている。

NHK放送文化研究所が1996年、18年ぶりに行った「全国県民意識調査」を見ると、既に

90年代半ばの段階において、「土地のことばが好き」と答えた沖縄の人の割合が83.0%に上っていた。また「この土地のことばを残すべき」と回答した人も85.3%おり、第2位以下に10%以上もの差をつけ、断然の全国第1位にランクされている。2011年の今日、沖縄の人々は自分たち本来のことばに思いを強く傾斜配分させながら、「うちなーんちゅ」とは何か、自らのアイデンティティを改めて探り始めていると言って差し支えないのではないか。まさに『竹富方言辞典』に込められた思い、「沖縄学」が追慕してやまない沖縄の魂に、沖縄の大衆から発する周波数が改めて同調し始めていると言えるのではなかろうか。

2. 5 沖縄県民の意識変化の現代的意味

「しまくとぅば語やびら大会」や「しまくとぅばの日」制定など、沖縄本来のことばへの関心が高まっている背景には、長い期間にわたり徹底的に続けられた標準語教育やテレビの影響によって、「本来のしまことば」が使えない人が多くなっているという、アイデンティティに対する不安ないしは危機感があつたことは確かである。多くの沖縄の人たちはその危機感から脱するために、自分の対極に「本来のしまことば」を置いたうえで、実生活では標準語化したことばを使う自身の現在の立ち位置が、いったい何を意味するのか、いま再び探り始めていると解釈することができるだろう。当然、そのアイデンティティが標準語に寄つたところに結ばれるとは考えにくい。使いこなせない人が多くなっているとはいえ、沖縄本来のことばに極力傾斜したところにアイデンティティを見出そうとするのは、「土地のことばが好き（「全国県民調査」）」な沖縄の人々にとっては自然なことであるに違いない。その斜度が次第に増してきていることは、各地の方言大会の盛況ぶりを見れば想像に難くない。

「沖縄本来のことばに極力傾斜したところ」とは言っても、所詮「本来のことば」とは違うのだから、そこから発する濃いアイデンティティなど期待できない。そのように考える人が多いかもしれない。しかしながら、確かに光源そのものの輝きではなくとも、温かく独特な光のニュアンスは十分に感じとれるのではないか。沖縄のことばと標準語とが混じり合っている「地域標準語」の状況がともかくも現実だとするならば、その中に「沖縄的な何か」を見出すべく目を凝らす姿勢こそが、最も「現実的」なのではないか。大切なことは、「沖縄的な何か」を求める姿勢の意識化の度合いを、研ぎ澄ますことではないか——そのような観点に立つとき、「本来の沖縄のことば」を対極に置くことによって、実生活におけることばとの差異に敏感であろうとしている、今日の沖縄の姿が、とても意味あるものとして浮かび上がってくるはずである。盛んな各地の方言大会や放課後のしまくとぅば教室は、単なる成り行きで開いているものではない。折に触れオリジンから発する光と熱を感じながら、己の立ち位置の意味を見定めようとする姿勢を、鍛錬し強化しようとしている、「大衆の沖縄学」の場なのである。

3. 地域言語に内包される発想・マインドの重要性

3. 1 分権と発信の時代 求められる、地域のアイデンティティ

自分たちのオリジンに触れようとするそのような試みが、次第に時代的意味を帯びようとしている。何故なら、「地方分権」が、各地で急速に現実味を帯びてきているからである。全国の各地域に対して、より大きな主体性が任されるととき、その地域の実力が問われる。とりわけ大切なものが、政治的・経済的・文化的な発信力である。

80年代に当時の国土庁の役人が考え出したという「イクラ型の日本」のモデルが、分権時代のイメージの的確な表現として有効である。そこには、東京から全てが発信され、地方がそれを受信するという、東京一極集中の中央集権のスタイルは見られない。各地域がまるでイクラの粒々のようにひしめいている。ひと粒ひと粒は独立しているのだが、それでいて緩やかに全体を構成している。重要なことは、どのひと粒も、それぞれに生き生きと光り輝き、発信を続けている——これがイクラ型の分権国家・日本のイメージである。

この分権国家の肝は、地域からの発信、それも、その地域ならではの発信である。東京一極集中時代の均質化した地域からの、どこかで聞いたような発信ではなく、それぞれの地域地域に独特な発信がなされるべきである。その「多様性」がイクラ型日本の強靱さを構成する。地域独特な発信力こそが、分権の時代には不可欠なのである。

もはや「地方分権」ではなく「地域主権」の時代なのだとも嘆かれてはいるが、果たして発信できる何ものかが、それぞれの地域において怠りなく準備されているのかどうか、その問いかけが重要である。分権が実現したときに、大した発信もできない、腰砕けの地域ばかりでは、いつぞやの政権交代騒ぎの二の舞にもなりかねないからである。

ここで再び想起されるのが「祖国とは国語」ということばである。己の本質・アイデンティティは、血の純粋性や国土という枠組みにあるのではなく、国語の中に生きている。つまり、地域のことばの中に、その地域に生きる人々の本質が生きている。継続的な発信に耐えうる独自の文化的資源は、己のアイデンティティの中にこそ求められる——そうであるとするならば、「己の胸中の泉」に向かって掘り進んでゆく沖縄学の試み、あるいは沖縄で方言大会を何十年も続けている人々のように、「オリジンから発する光と熱を折に触れ感じながら、己の立ち位置を見定めようとする姿勢の鍛錬を、たゆまずに継続する」ことこそ、分権時代に向かってゆく私たちにとって、学ぶべき理にかなった方法論であると評価できるのではないか。

3. 2 関西のことばに宿る、関西の発想・マインドを見る

「己の本質」とは何か、地域のアイデンティティは地域言語とどのような深い関係を持っているのか。そのテーマを具体的に論じるために、自分たちのことばに沖縄同様に愛着を持ち続けている、もう一方の地域言語の雄である、関西のことばを例に考えてみよう。

大阪圏の発信力は、ひと頃に比べやや低下気味ではあるものの、京都も含めた関西地域としては先端的で独自の発信を続けていると言える。例えば、京セラ・村田製作所・日本電産・日本電工・任天堂・ローム・キーエンスなど、大阪と京都を結ぶ淀川沿いの地域に、高利益

率・高収益・高株価を維持し続ける国際企業が綺羅星のごとく並び、「京阪バレー」⁷の異名をとっているという壮観も、京セラが京都の磁器生産の伝統技術に立脚していたことなどを考えるとき、この地域の文化的資源と無縁ではないことに思い至る。また、その文化的資源は、地域のことばに特徴的な、独特な発想・マインドによって支えられていることにも気づくのである。

自己のアイデンティティとは、自分本来のことばに含まれる発想・マインドに気づき、それを認識するところから生まれてくるものである。その点について、大阪・京都のことばを例に考えてみよう。

東大の言語学者・尾上圭介が示しているように、いわゆる大阪弁における命令の表現には、実に多様な変化形が用意されていることに驚かされる。例えば「言え」ということばをもとに考えてみよう⁸。

標準語では、「言え・言えよ」「言って・言ってよ」というのが基本的な形である。これに対して大阪では、「言え・言えや」「言い・言いな・言いや」「言うて・言うてえな・言うてや」と、命令や話のもちかけの基本的形の段階からして、バラエティが東京より豊かである。

また大阪のことばでは、それぞれに「んか」をつけた形もあって、「言わんか・言わんかい・言わんかいな・言わんかいや」「言いんか・言いんかい・言いんかいな・言いんかいや」「言うてんか・言うてんかいな・言うてんかいや」と実に多様な拡がりを見せる。

その上、「なはる形」として「言いなはれ・言いなはれや」や、「なはらんか形」の「言いなはらんか・言いなはらんかかいな」もある。更には「しまへんか形」とも言うべき「言うとくなはらしまへんか・言うとくなはらしまへんかいな・言うとくなはらしまへんやろか」という具合で、大阪のことばには、何と30近くもの変化形が展開できるだけの、表現上の用意があるのである。

いったい何故なのだろうか。命令の変化形が10種類にも満たない標準語と比べると、実に3倍もの多様性である。

京都のことばにおいても、同じように多様な言語的選択肢が用意されている。楳垣實の『京言葉』⁹という本は、「早くしなさい」という意味を伝える命令表現を例に、33種ものバリエーションが用意されていることを伝えている。

早うセー 早うシー 早うシーナ 早うセンカ 早うセンカイ 早うセンカイナ
早うシンカ 早うオシ 早うオシーナ 早うオシンカ 早うオシンカイナ
早うシナハイ 早うシナハイナ 早うオシナハイ 早うオシナハイナ
早うオシナハンカ 早うオシナハンカイナ
早うオシヤス 早うオシヤスナ 早うオシヤハンカ 早うオシヤハンカイナ
早うシテクレ 早うシテクレンカ 早うシテクレンカイナ
早うシトクレヤス 早うシトクレヤスナ
早うオシヤシトクレヤスナ

早うシテクレハラシマヘンカ

早うシトクレヤサシマヘンカ

早うシヤハレ 早うシヤガレ 早うシクサレ 早うシクサランカイ

因みに、京ことばでは婉曲表現も高度に発達しており、「～を下さい」という直接的な言い方を基本的にはせず、「～おくれやさしまへんやろか」という表現を好むということも紹介されている。

何故、大阪や京都のことばが、このように細やかで多様な表現を、その言語宇宙の中に用意しているのか。それは、相手と自分との関係やその場の状況を精妙に感じとり、ピタリと対応すべく、命令や要求の仕方を機敏に使い分けようとする発想・マインドが、この地域には横溢しているからである。

千年の都・京都にも、天下の台所・大阪にも、他の土地から様々な仕事を持った、多様な階層の人たちが訪れる。現代風に言えば「他者」が集い行き交う都会、それが大阪であり京都であった。大阪や京都の人たちは、そのいわば他者との間に適切な関係を築く必要を感じる。そこでまず、相手の気持ちや状況をよく観察する。そしてその相手の気持ちや状況、ひとことと言えば相手のニーズに最も適うように、ことばの上できめ細かく、かつ敏捷に対応しようとする。相手ニーズは、それこそ千差万別である。ましてや、相手に対して命令形ものを言おうという場面である。精確にピンポイントで効果を発揮し得ることばを繰り出し、決してハズさないことが肝心となる——こうした対応が、日常的に求められる「都会」においては、20や30の変化形の用意は当然のことであり、相手のニーズに、デリケートできめ細かな対応をしようとする発想・マインドが、必然的に発達し身体化されてゆくのである。

3.3 関西の発想・マインドからの、全国への発信

この都会としてのマインドを活かし、大阪や京都の人々は、様々な生活文化や産業を生み出し、それらを全国に発信し続けてきた。以下は、そのいくつかの例である。

大阪市交通局が、「大正区・都市新バスシステム」の一環として開発し設置したバス停用大型電光表示盤も、バス利用者という「相手」への、キメ細やかな対応マインドに溢れている。この大型表示盤は、バスが今、どの区間を走り、どの停留所に着こうとしているのか、あるいは着いたのか、何と7つ前の停留所から電光表示してくれるのである。他の都市には、このような表示盤は存在しない。「設置してみてもどうか」と誰かが発案したとしても、「何でそこまでやるの」と、まずは頭から否定されてしまうに違いない。

7つ前からとはいかないが、2つ3つ前からであれば、電車の現在位置を表示できる装置がついていることは、大阪や京都の地下鉄・私鉄・JRの各駅のホームではほとんど常識である。同様に、関西で当たり前のように設置されている乗車切符の券売機には、数個のコインを一度に投入できる。東京などでも、最近はこのタイプの券売機が増えてはきているが、相変わらずコインを数ミリ幅の細長い投入口から、1個ずつ丁寧に入れなければならない券売機も少

なくない。お年寄りなどが後ろの人から急かされる光景を、おそらくは見たことがあるだろう。

この券売機を大阪市交通局が開発したときのエピソードを取材したことがある。券売機の開発と並行して、スプレー缶も考案したという裏ばなしを聞いた。コイン投入口にガムを詰める輩が必ず出てくるに違いない。そこで開発されたこのスプレーは、そんなときに投入口から噴射すると、たちどころにガムが固化して、細い棒で突いてやればポロリとコインボックスの中に剥げ落ちるといふ、隠れたスグレ物なのである。

尽きない事例のまとめとして、きめ細かい対応のお馴染み版を紹介しよう。JR大阪駅そばの梅田交差点の信号機に付随して設置されている表示板である。赤信号が青に変わるまでの残時間を秒単位で電光表示してくれるのは、「いらち（せっかち）」な大阪人の気性へのサービスである。どこに行ったら、せっかちな人間のために対策を講じてくれる「国」があるだろうか。他の地域では、「そんな無意味なことをナゼ」と、頭ごなしに否定されてしまう。そのような細かいニーズであったとしても、関西では尊重され、「オモロイ」と感じられれば、開発費をかけて製品化し、場合によってはシステム化までしてしまう。

そんな人たちの発想・マインドは、実は関西のことばの中にしっかりと息づいている。まさに「祖国とは国語」。アイデンティティとは、地域のことばの裡にあり、「己の胸中の泉」の中から湧き出ずるものなのである。

3. 4 発想・マインドからの、世界への発信

堺屋太一によると、戦後生まれた新しい業種・業態の4分3は、大阪を中心とする関西から発信されていったものだったという。スーパーマーケット・ビジネスホテル・サウナ風呂・プレハブ住宅・自動改札機……。消費者金融も関西発であった。どれをとっても、私たちの戦後の生活と社会のスタイルを、何らかの形で基盤から支えてきたものばかりである。そのいずれもが、相手のニーズへの細やかな対応や、進取の気性、あるいは新しもの好きなどなど、大阪や京都のことばの背後で脈動している、多様で独特な発想・マインドと深く関係しているのである。

地域のことばが今よりもずっと元気だった江戸時代にまで遡ってみると、のちに世界が評価することになる強力な文化発信が飛び交っていたことは、多くの人の知るところである。上方と江戸——江戸時代の東西それぞれの地域には、それぞれに独特な発想・マインドに裏づけられた、高いオリジナリティが並び立っていた。歌舞伎は、その一例である¹⁰。京都の歌舞伎を特徴づけるのは、初代・坂田藤十郎が元禄期に確立した「和事」である。藤十郎演じる若い男は、後ろから背中を指先でつつくだけで転びそうになるほどの、デリケートな「つつころばし」。彼と遊女との道ならぬ恋を、今流に言えば社会の様々な不条理がはばむ。その中でもがき続ける2人の心のひだを、細やかに精緻に描写してゆくリアリズムの市民劇。それが和事である。まさに千年の都・京の町でかわされていることばの世界、そのものの演劇化である。

一方、元禄期のほぼ同じ時期の江戸では、初代・市川團十郎によって「荒事」が確立され

ていた。怒りの表現、隈取りメイク。大きく誇張されたビジュアル。勸善懲惡の極みに観客も同調させる見得のストップモーション。舞台上で繰り広げられる大活劇・荒事歌舞伎は、江戸開府を目ざして行われた巨大埋め立て工事のために、各地から流入してきた血気盛んな若者たちの、威勢のいい躍動感溢れることばや、その気性・発想・マインドの演劇化であった。

マッチョでポップな荒事と、しっとり魅せる京都の和事。歌舞伎が、平成17（2005）年に無形文化遺産としてユネスコに登録されたのも、江戸時代の多様性の競い合いによって止揚された歌舞伎のオリジナリティの達成であり、世界的認知だったのである。

4. 分権と発信の時代への6つの提言

4. 1 「方言」時代のトラウマを超えて実践を

ここまでの考察を通して、関西のみならず全国各地域のことばの背後にある、その地域に独特な発想・マインドに着目し、そこから改めて、「自分とはこういう発想をする人間なのだ」との自己の再認識（自分自身の本質への気づき）を深め、その発想やマインドを、生活の中で意識化して活性化してゆくことの、大切さと時代性が見えてきたはずである。

分権時代の要である、地域の発信力の源となる文化的資源は、地域のことばの中にある。有体には、地域のことばの中に「眠っている」。眠っているのだから、まだ失われてはいない。地域のことばが大いなる不調から脱してゆけば、やがて眠りから醒め、動き出してくるに違いない。そう簡単に消滅しないと楽観するのは、長い歴史とその土地ならではの風土と生活の中で、私たちの本質として薄塗りを重ねてきたものだからである。

ただ、地域のことばが、これまでに相当なダメージを受けてきた事実は、分権の時代に向かう私たちが心しておくべき点のひとつだ。例えば東北地方では、「方言矯正法」が実行され、沖縄と同じように方言札が用いられながら、方言撲滅運動が展開された。ことばをめぐる人格そのものを否定されるほどの恥ずかしめを受けた人も多かった。国会議員だった中山千夏は、宮城県出身のひとりの代議士が国会答弁に立つたびに、議場は笑いと汚い野次に包まれたと書いた。昭和57（1982）年の朝日新聞の記事¹¹である。母なることばを否定され、生活の文化までもが田舎くさいと嘲笑された人々は、その誇りをズタズタに切り裂かれ、傷跡はトラウマ化した。

地域が誇りと自信をとり戻すためには、このトラウマを乗り越える必要がある。それには、沖縄学の系譜に連なる人々が地道に実践し続けているように、たとえ遠回りに思えても、王道を往くことが一番の方法であるはずだ。地域のことばを対象に、なるほど自分はこういう歴史と風土の土地に育ち、こういう特性を持った人間なのだと学びなおす。再び自己を認識しなおすところから始めるのである。いくら「言葉の変化はたいへん急激」¹²だからと言っても、分権時代になってから慌てても遅い。いま私たちがどうしても地道な実践を通して取

り組んでおかねばならない課題のひとつが、この学びなおしである。

地域の中には、取り組みを開始したところも出てきている。先ほど述べた通り、地域ごとの独自性はこれまで休眠状態にあり、全国画一の均質性がその上に厚塗りされた。地方のどの駅に降り立っても、駅前にはロータリーがあり、アーケード式商店街が延びている。東北の山深い村の旅館に泊まっても、夕食は刺身にてんぷらで迎えられたのである。しかし今、その東北地方にも新幹線が通った。分権の時代には、東京に行く新幹線ではなく、東北に来てもらう新幹線である。その新幹線の時代、東北のことはめぐる、興味深いことが始まっている。ひとつは、ローカルなことばと標準語との差異をとり上げて笑ってもらうという、「おなぐさみ」からの脱皮の開始である。新たな時代のキーワードのひとつは「おもてなし」である。東北のことは「おもてなし」¹³に役立てられるという捉え方が、発見され台頭してきていることは、なかなか興味深い。勿論、単なる観光利益に利用しているだけだと、斜に構えて批判することも可能だ。しかし、「おなぐさみ」から「おもてなし」への移行は、時代が微笑む、それなりに本質的な変化なのである。何よりも、東北の人々が「他者」とのコミュニケーションにおいて、自分たちのことを文化として「カミングアウト」させ始めたことの意味は、それなりに大きい。

とはいえ今後は、観光第一に流れがちな危うさを乗り越え、分権の時代にふさわしい、胸を張った発信姿勢へと磨き上げていってもらう必要がある。そのためには、せっかく「おもてなし」へと進化させてきている東北のことはの使い手たちに、もう一段の言語的イノベーションを期待したい。しかし、そのようなイノベーションの積み重ねが、どのようにしたら可能になるのだろうか。

※ この稿の編集作業の校了直前に東日本大震災が発生し、東北地方は未曾有の被害に見舞われました。心よりお見舞い申し上げます。第4章5節で紹介している『ケセン語大辞典』を著した山浦玄嗣氏の所在の確認が、校了日の3月18日にとれました。先生の意気軒昂なケセン語論が聴ける日を念願してやみません。

4. 2 「祖国とは国語」の真理性を胸に

地域のことはが再活性化し、それぞれの地域に独特な発想・マインドが再認識され、そこから豊かな発信が各地からなされる時代は、その気になれば十分に可能なはずである。事実、ほぼ消滅した言語が、人々の執念によって生命を賦活させ、イノベーションを果たして見事に発信に転じた例を、私たちは歴史の中に持っているからである。

イギリスに征服され、12世紀半ばに植民地とされたアイルランドの人々は、その後、数世紀にもわたって自分たち固有の言語であるゲール語の使用を禁じられてしまった。ところが数世紀の後に、民衆の間から文芸復興運動がわき起こる。それは、ほとんどの人が英語しか話せなくなってしまった19世紀終わり頃から始まった。彼らは、老人への語彙・文例の聞き

取りや、農民からの伝統採取など、地道だが確実な王道を地道に歩みながら、ゲール語を復活させていった。彼らは更にイノベーションを重ねた。近代国家の言語にふさわしいレベルにまで磨き上げてゆく努力を惜しまなかったのである。そして遂に、アイルランドとして独立を果たしたのは1937年のことであった¹⁴。

この言語復活の動機に対して、分権時代を前にした私たちは眼を凝らすべである。ゲール語を自分たちに取り戻そうと考えた動機——それは「自分が自分であることを大切にする」、ただそれだけの、しかし人間にとって最も光輝ある生き方の選択だったのである。

アイルランドの人々の、堅忍不拔で真摯な取り組みを知ったときに、この稿が控えめに仮説として提示した「祖国とは国語」ということばが湛えている深い真理性に、改めて首肯する人は少なくないはずだ。

4. 3 地域言語の不調を問題意識に

アイルランドのこの歴史は、自分たちの言語の中に、かけがえのない心の資産が含まれているのだということを教えてくれる。その教訓は、分権社会の建設に本格的に取り組もうとしている私たちにとって、とりわけ大きな今日的意味を伝えてくれる。

私たちが求めて迎えようとしている分権の時代にあって、「発信」がみすばらしい地域は脱落してゆくに違いない。分権の時代とは、地域からの発信の時代とイコールだからである。ところが私たちの地域の多くは、戦後数十年の間にすっかり均質化し、特徴や色合いが希薄になり、貧弱な存在となっている。確かに全国が標準語化したことにより、国民どうしのスムーズな意思疎通が可能になった。一億総中流社会も実現した。どこへ転動しようと、ほぼ同じ生活ができる。しかし、高水準に均質化した力をいくら結集したとしても、社会はうまく回らなくなったのである。東京一極集中をはじめとする戦後の「勝利の方程式」が時代遅れになったことに、私たちは気がついた。そこでひねり出した知恵が分権社会への切り替えである。雑駁に言えば、多くの基本モードが逆になる時代である。ひたすら「東京の指示待ちだった地方」に権限が移ってゆく。均質だった社会は、多様性に価値を置く社会へと移行してゆく……。

では、その多様性はどこから供給されてくるのだろうか。「祖国とは国語」。その土地々の風土と歴史の中で磨き上げられてきた、それぞれに独自の「ふるさとのことば」の中からである。そのことは、納得できたはずである。

ところが、ふるさとのことば自体は、現状、大いに不調である。問題はそれだけではない。自分たちのことを自己否定してきたことによって、「己の胸中の泉」に含まれる、歴史と風土に育まれた独特な発想やマインドをも、私たちは顧みる価値がないものとして視野の外に置き去りにしてきた。実はこのことこそが、分権の時代、発信の時代における大きなネックであり大問題なのである。「いやむしろ」である。新時代に進もうとするときに、ふるさとのことばが不調であることが実はブレーキになってしまうことへの、気づきや着眼ですら、ま

だ十分になされていない。地域はその意味で、まだ結構ノンキなのである。このままでは、分権がかなり進んでから、地域のことばと、その背後にある発想やマインドの再認識のプロセスを、慌て始めなければならなくなる——そのタイミングの遅れの方が、より大きな問題なのかもしれない。

4. 4 「地域」に吹く風をはらんで

現実には、地域のことばが担う分権時代の役割の大きさに、まだあまり注意が払われていない。

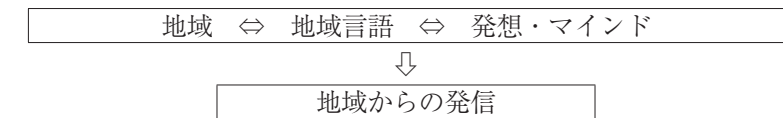
確かに、「方言」への扱いは良くなってきた。人気の高い芸能人が、番組やCMの中で「方言」を堂々と使って人気上がる時代になった。訛っているアイドルが「なまドル」と面白がられる。昔の若い女性タレントなら「訛り」は隠したものである。既に、「方言」でメッセージされる自動販売機やカーナビも、さほど珍しいものではなくなった。映画の世界でも、全編が津軽のことばという『ウルトラミラクルラブストーリー』が製作されメジャー公開(2009年)される時代である。脇役の原田芳雄や渡辺美佐子の言語指導は勿論、下北ことばで育った主演の松山ケンイチに、「全然違う」津軽のことばを特訓し、ラブストーリーなのにロケ地は全て青森県内という映画である¹⁵。

「方言」への関心があがったことに加えて、「地域の特性」への注目度も高くなった。日本テレビ系列で平成19(2007)年から全国放送されている『秘密のケンミンショー』は、「同じ日本なのに、こんなに違う県民性」を確かめることをコンセプトに、毎週10パーセント以上の視聴率を維持する異色の人気番組となっている。美人の人気タレントが、「実は私、〇〇県民なんですー」と「カミングアウト」する趣向は、ことさら出身地など話題にせず、「方言」を封印してきた時代から、「もう抜け出したって構わないのよー」という、ある種の解放感に溢れている。とはいえ最近では、各地域に独特な食習慣ばかりが話題化され、発想やマインドの面にまでは、なかなか視線が深まらない。バラエティ番組の限界なのだろうか。

NHKの番組にも、地域への関心がうかがわれる。2003年から7年間放送された『難問解決ご近所の底力』がそうだった。その後継番組的存在として登場した『欽ちゃんのワースト脱出大作戦』は、年間4回放送される地域問題バラエティで、全国ワーストだった汚れた川を清流に戻すプロジェクトを実際に推進するなど、地域の人々の意識を「見える化」してゆく大型番組である。この稿を執筆している時点での最新情報としては、平成23(2011)年3月21日に、「地域」をテーマにし、NHKの地域放送局が制作したドラマとドキュメンタリーが一拳8本放送される予定である。プレス試写会を視た朝日新聞の記者は、例えば福岡放送局制作のドラマ『見知らぬわが町』は、エンディングのあとも感動の余韻がしばらく消えなかったと述べている¹⁶。

民放でもNHKでも、「地域」が番組づくりの新しいフロンティアとなっている。しかし、「地域」がひとつのトレンドになってはいても、その関心が「地域の言語」と結びついてゆく番組はまだ登場していない。ましてや、「地域に独特な発想・マインド」にまでは、着眼が及ん

ではない。番組の編成権に及ぶ話は控えるとしても、以下3つの要素がスムーズに連携し合うことが、「発信」力が問われる分権時代において重要であることを、私たちは認識しておく必要があるだろう。



分権時代に向かおうとする日本の社会が、「地域」への関心を高めつつあるのは当然である。これからは、「地域の言語」にまで関心が及び、放送も含めて、地域ならではの発想・マインドにまで視線を注いでゆくことになってゆくのではないか。そのように期待したい。

もし今後、「地域」への着目が「地域言語」をクローズアップさせ、その「地域言語」が地域の生活の様々な場面で使われ始めさえすれば、地域からの個性的な発信が開始されるなど、事態が急激に変わってくる可能性は高いと考えられる。ことばは実際の場面で「使う」ことが先決である。使っていれば、発想・マインドも自律的に動き出し、人々は心の中に眠っていたものを思い出すはずである。その意味で、新幹線がやって来た東北で始まっている「おもてなし」としての地域言語の活用が、これからどのような展開を見せるのか、期待をもつて見つめてゆきたいと、先ほどは楽観視したのである。

4. 5 「方言」ではなく「言語」としての誇りを

「地域言語」からの強力な発信を続けている実践活動について伝えておかねばならない。現代日本の言語文化にも、まだまだ多様性が健在であり、決して捨てたものではないと判れば、地域言語のこれからの、大いに勇気づけることにつながるはずだ。

その実践活動の成果のひとつが、岩手県南部の気仙郡のことばを調査・研究し、上下2巻B5版2,800ページに34,000の語彙を収めた『ケセン語大辞典』¹⁷である。刊行は、平成12(2000)年。ケセンのことばの微妙な抑揚や発音は、新規考案された「ケセン式ローマ字」で表現されている。全ての見出し語に用例がついているのは、ごく小さな国語辞典1冊を除けば、どの国語辞典にも方言辞典にもなかったことである¹⁸。画期的なことづくめのこの大辞典について、この稿が特筆すべきは、著者である大船渡市で内科医院を開いている山浦玄嗣¹⁹が、自分のふるさと気仙郡のことばは、価値基準と文法体系とを持った整備された水準にあると捉え、「方言」としてではなく、独立した「言語」として、その存在を全国に向かって宣言し発信した点である。山浦の主張には、分権時代の感覚で耳を傾ければ、十分に納得できる論理性が通っている。

もともと、「地方」や「方言」という言い方は、「中央・東京・標準語」からの統制的で旧時代的な目で見たとときの表現であった。これからの分権の時代には、「地方」よりは「地域」であり、「方言」よりは「地域のことば」ないしは「地域言語」の方がふさわしい。また、「方言」ではなく「言語」なのだ、誇りを持って言える「気概」を持つことも、分権時代の各

地域には求められる。

山浦が、ケセン語を使って盛んに講演や演劇活動²⁰などに向き合っているのも、分権時代の言語文化を考えるうえで、極めて示唆に富んでいる。そこにも、「方言」とは明確に異なる、「地域言語」のあり方が示されているからである。一極集中時代にあつて、方言は私的場面におけることばとされた。公的場面に使えるような言語的整備が方言にはなされておらず、話しことば・書きことばを問わず、パブリックな場面では方言は使えず、もっぱら標準語によると考えられたのであつた。敢えて繰り返すが、言語としての自立性が標準語には備わっており、方言はそれを欠いているという認識がそこにはあつた。果たして本当にそうだったのだろうか。

歴史を考えてみれば、大阪や京都のことばが、公的場面で通用する価値観や体系を持っていることは容易に想像できる。地域のことばが「非論理的」だというのは言語的な偏見に過ぎない。実際、関西のことばで論理的な講演を成功させ、先ごろ亡くなった京都大学の森毅のように、大学で数学の講義をする人も珍しくはない。では、東北のことばによるそれは可能なのか。山浦は可能だと胸を張る。山浦は、奈良・平安以前から引き継がれてきた父祖伝来の言語を活かし、地域の内外で、放送に出演しては論理的に話し、大学などで医学のテーマによる講演で若者を鼓舞し、自身の信仰をもとに新約聖書をケセン語に訳し公にする仕事²¹などを精力的に続けている。たとえズー弁であつたとしても、言語としての対等な立場を主張する権利があると考えた山浦は、「自分が何ものであるかを自覚し、自分自身を深め、高め、自分自身の文化を高めようとする欲求」が大切で、そこから生まれ育てられる若い個性によって、文化が「魅力的なものになり、真に国際的なものになる」と、ケセン語圏内の若者に訴えつつ、全国の地域言語に対してメッセージを発し続けている。

4. 6 地域言語で果敢に公的表現活動も、という時代に

地域言語として活力があり、コンプレックスが一番少ないと考えられている関西のことばですら、いざ会合で話すとなると、家にいるときと比べて地域言語の使用が4割も減るといふ調査結果が出ている（1991年。NHK放送文化研究所²²）。北海道・東北、関東、中部・北陸・東海、中国・四国、それに九州と、その他の地域でも傾向は全く同じである。山浦のケセン語による日常の実践活動のみが意気軒高という状況である。

しかし、これからの分権の時代には、少なくとも地域内の公的場面において、地域言語によるコミュニケーションの場面が増えてくることが望ましいし、そのように変化してくることが十分に期待できる。地域言語をパブリックな状況の中で使い続けてゆくことによって、その地域に独特な発想・マインドが活力を得る。そのようにして賦活された発想・マインドの力によって、やがてその地域から、その地域らしい個性的な発信が始まる。

しかし、その地域言語は既に、「方言」や「～弁」と呼ばれていた昔懐かしいことばそのものとは大きく異なっている。それでも構わないのだろうか、との疑問が湧くことであろう。

その問題を考えるに当たっては、「地域標準語（既出の注5を参照）」という概念を持ち出す必要がある。地域標準語は、地域のことばと標準語とが混じり合うかたちで、現実生活の

中に息づいている。中途半端で曖昧だというマイナス評価も可能だが、地域のことばと標準語それぞれの機能、いわばハイブリッドな特徴を持つことばであると、ポジティブに位置づけることもできる。他の地域の人に対しても、相当程度の伝達力を持っているのは、標準語の要素を備えているからである。加えて、実生活の中における習熟度は、当然のことながら極めて高い。大切なのは、長所を活かし短所を矯める言語使用の姿勢である。公的場面における言語として磨き上げ、更に整備を重ねてゆくことである。

この地域標準語を、私的場面を超えた公的なシーンにおいて果敢に使ってゆくことを、地域内で意識化してゆく。より具体的には、地域標準語をもとに考え、発想し、書いたり話したりしてゆく。そのことによって、パブリックな言語としての条件が次第に整い、「地域言語」としての足腰が鍛えられてゆく。くどいようだが、分権の時代は、地域からの個性ある発信の有無が大きな意味を持つのである。メディアが発達した時代においては特に、「言葉の変化はたいへん急激（既出の注12を参照）」なのであるから、地域言語と分権意識とが絶妙のハーモニーを奏でる地域が、全国各地に生まれてくる可能性は非常に高いと考えられるのである。

まとめ

沖縄の『竹富方言辞典』から稿を起こし、関西のことばに発想・マインドの底力の偉大さ確かめ、東北のことばを通して、地域言語としての自覚と誇りから発信されるメッセージが、分権時代のイクラ型ニッポンの輝きにつながってゆくことを述べてきた。何度か使ってきたもうひとつのキーワードを、締めくくりとして印象づけておく必要を感じている。

沖縄では、沖縄古代のことばを伝える「おもしろ研究」をもとにした「沖縄学」の100年の伝統が受け継がれている。東北地方では、東北芸術工科大学教授の赤坂憲雄による「東北学」の、息長い研究が開始されて久しい。考古学者の森浩一が歴史学の網野善彦(故人)と共に「関東学」を創始した。日本各地をフィールドとする地域学が、いま盛んになりつつある。赤坂憲雄の「『ひとつの日本』の破産をうけ、『いくつもの日本』を照らし出す」、森浩一の「日本は古代から多様だった」などのことばに接するとき、伊波普猷が『古琉球』のまえがきの中に万年筆で手書きした、「深く掘れ 己の胸中の泉 餘所たよて水や汲まぬごとし」のことばが再び浮かんでくる。ことばの中に発見される「己とは何か」、つまり自分自身への気づきが、本質的な誇りと自信に結びつき、地域がひと粒のイクラのように輝きを発する。そして、分権化が進んだ各地域から、独特な発想・マインドに裏打ちされた発信が続く。新しい時代の多様性とは、そのようにして花開いてゆくのである。そして、「国土の均衡ある発展」を謳った東京一極集中時代の均質化してゆく人間と社会ではなく、「国土の特色ある発展」という分権時代にふさわしい、発信型の地域と人間を創り上げてゆく。それこそが、私たちが追い求めるの21世紀の日本の社会像ではないであろうか。

引用及び注

1. Emil Cioran (1911～1995)。ルーマニアの作家、思想家、哲学者。もとのことばは「私たちは、ある国に住むのではない。ある国語に住むのだ。祖国とは国語だ。それ以外の何ものでもない」というものである。バルカンのパスカルとも呼ばれたシオランの仕事の大半は、アフォリズム・警句や独白に近い、短いエッセイ形式であった。山本夏彦も、晩年の作品にシオランのこのことばを、しきりに引用していた。
2. 『祖国とは国語』(2003年 藤原正彦 講談社)
3. 『竹富方言辞典』(2011年 前新透 南山舎)
4. 1911年出版の学術書。沖縄の言語をはじめ、歴史・民俗・文学などの研究書であり、『おもろさうし』と並んで沖縄学の最重要文献。2000年には岩見文庫としても出版された。
5. 言語学では「地域共通語」とされるが、本稿では「共通語」を語彙として敢えて使わず、統制色が強い「標準語」をもっぱら用いている。真田信治著『標準語の成立事情』(1987年。PHP)には、「地域共通語」について、「ある限られた地域だけで、純粋方言の上にかぶさって広く行われることばがあって、これを“地域共通語”と称することがある」と解説されている。「地域標準語」の意味は、この解説に準じて考えていただければよい。
6. 本稿では「地方分権」の表現は使わず、単に「分権」「分権時代」と表記する。その理由は、「地方」とは中央集権や東京一極集中との対比において使われてきたことばであり、分権の時代には「地方」は馴染まず、「地域」の表現の方が適切であると考えているからである。最近では「地域主権」と言うようになってきているが、異論も多く、本稿では避けた。
7. 『京阪バレー』(1999年。日本経済新聞社編)など。「バレー」は「シリコンバレー」になぞらえた。
8. 『大阪ことば学』(1999年。東京大学教授・尾上圭介。創元社)
9. 『京言葉』(1949年 榎垣實 高桐書院の京都叢書5)
10. 『歌舞伎』(2001年。河竹登志夫。東大出版会)『歌舞伎の話』(2000年。今尾哲也。岩波新書)
11. 昭和57年4月10日付の朝日新聞に掲載された、当時参議院議員だった中山千夏の随筆記事。
12. 2001年11月29日に行われた(株)ジャストシステムの「ATOK監修委員会10周年記念シンポジウム～ケータイ言葉から方言まで」において、作家で同委員会座長の紀田順一郎が基調講演で述べたことば。その中で紀田は、「ちょうど1902年(明治35)頃から、標準語を強制し、方言をなくしていこうという動きが出てくるわけです。ただ、この『坊っちゃん』の段階では、学校教育の現場で方言が機能していて、何より生徒のあいだに方言に対するコンプレックスがなかったということを物語っているわけです。その後、地方から東京に大量の人、主に次男坊、三男坊が出ていきますね。そして、それによって中央の言葉との接触が行われ、10年ほどの短い期間に方言に対する意識が変化していくわけです。ここで言えるのは、言葉の変化はたいへん急激だということ

すね。特に最近のようにマスメディアが発達しますと、その変化が加速されて、言葉というものがゆっくり、のんびり変化するということがなくなってしまいます。その兆候が明治30年代、40年代にすでに現れているわけです」と述べている。(行替え等は本稿筆者)

13. 「おもてなし」は、特にサービス業などで重要視され始めている。ホテル経営論などでは「ホスピタリティ」の表現も用いられ、ホスピタリティをテーマとした書籍が多数出版されている。
14. 『アイルランドの反乱～白いニグロは叫ぶ』(1970年。堀越智。三省堂新書)
15. 2009年6月劇場公開。訛りが強くて、意味は映像で追えるはずであるし、外国語のような抑揚がある津軽のことばを、音楽のように楽しんでもらってもよいという考え方で、東京から来た幼稚園の先生(麻生久美子)以外、全ての俳優が津軽のことばで話している。
16. 平成23年3月1日の朝日新聞「フォーカスオン」に掲載された丸山玄則による記事。
17. 『ケセン語大辞典』(2000年。山浦玄嗣。無明舎出版)。岩手日報文化賞の学芸部門受賞。
18. 『ケセン語大辞典』出版に寄せた、東大名誉教授・言語学者の柴田武の推薦のことばより
19. 山浦玄嗣は1940年生まれ。東北大学医学部卒業後、大学院にて医学博士となる。東北大学抗酸菌病研究所助教授を経て、1986年に郷里大船渡市盛町で山浦医院を開業。医学のかたわら、ふるさと気仙地方のことばの研究に当たってきた。山浦の手により出版された、『ケセン語入門』(1989年)が文法書と教科書であり、『ケセン語大辞典』(2000年)が辞書であることから、ケセン語は言語としての「3種の神器」である、文法書・教科書・辞書の3つを備える言語となった。
20. 山浦玄嗣は、地元の仲間とともに「ケセン語劇団・竈ヶアし座(かまけあしざ=カマをひっくり返す座)」を結成し、ケセン語による演劇創造のために脚本執筆するなど、代表として活躍している。特に若い人たちに、ケセン語による公的表現・創造的表現の豊かな可能性を伝える場として機能している。
21. 『ケセン語訳新約聖書・マタイによる福音書/マルコによる福音書/ルカによる福音書/ヨハネによる福音書』の出版(2002～2004年)によって、山浦玄嗣は聖書の翻訳まで可能であるケセン語の存在価値の高さを実証した。文法体系書を持ち、34,000語の大辞典を持ち、その言語で訳された聖書を持つということは、国際的に一人前の言語であることの証左であると考えられることができる。注19も参照のこと。
22. NHK放送文化研究所が平成2(1991)年暮れ、全国1,800人を対象に行った第6回言語環境調査では、「変わりゆく日本語」をテーマに日本語の変化予測に役立つデータを中心に収集した。その中で、
▽方言を使う人は減っている ▽しかし、方言に悪いイメージを持つ人は少ない
▽家では方言、公的な場では標準語という使い分けがほぼ定着している
などという結果が確認されている。